

公共道路(一般県道前橋安中線)交通安全対策工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

三ツ寺 I 遺跡

昭和 56 年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

98- 4148	群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-352
	平成10年 5月13日	60 (13)

三ツ寺 I 遺跡

序

一般県道前橋安中線は県都への道路として、主要な交通網の役割りを果たしており、通行量の多い道路です。歩行者の交通安全対策上、歩道建設工事を実施することになりました。

本工事ヶ所は、昭和56年5月から9月の上越新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、6世紀代—古墳時代—の豪族の居館址と考えられる貴重な遺構が発見され、日本で最初の調査例として、学界でも注目を集めたところです。

本調査は歩道工事という小範囲ではありましたが、上越新幹線用地の調査結果を補い得る成果が挙げられました。すなわち大規模な土木工事であったと考えられる濠や盛土の規模、遺構の時期決定をさらに確実にした榛名山二ツ岳の火山灰の再確認など、小規模な調査でありましたが大きな成果をもたらしました。

本遺跡では今後、上越新幹線側道建設工事に伴う事前調査を、昭和57年度に実施する予定であり、今回の調査成果を踏まえた、より良い調査が期待されます。

御指導、御協力を賜った関係各位に深甚な謝意を表するとともに、今回の調査結果が多くの方々にも活用していただければ幸いです。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

- 1 本報告書は公共道路（一般県道前橋安中線）交通安全対策工事に伴う事前調査によるもので、県教育委員会（文化財保護課）との協議を経て、県土木部（道路維持課）の委託を受けて、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施した。
- 2 発掘調査は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員 下城 正と嘱託員 新井順二の2名が担当した。
- 3 遺物・図面整理は、福田恭子 福島恵理子 坂庭常磐が行ない、本書の編集・執筆は下城正が担当した。
- 4 本発掘調査において、地元関係者および大勢の地元発掘調査作業員の協力があり、深く感謝の意を表わしたい。

目 次

序 文	
例 言	
I 三ツ寺 I 遺跡の概要	1
II 調査にいたる経過と調査経過	3
III 各調査区の状況	5
IV 平安時代の住居址と遺物	6
V ま と め	9

挿図・図版目次

第1図 周辺の遺跡	2	第4図 滑石製模造品	6
第2図 三ツ寺 I 遺跡調査区全体図	4	第5図 平安時代住居址実測図	7
第3図 C区・濠土層図	5	第6図 平安時代住居址の出土遺物	8
図版 I 1 三ツ寺 I 遺跡より愛宕塚古墳を望む		図版 IV 1 平安時代住居址遺物出土状態（北西より）	
2 調査区近景（南西より）		2 C区北壁断面（濠の覆土、南より）	
図版 II 1 A区（南西より）		図版 V 1 平安時代住居址の出土遺物	
2 A区南半の状況（西より）		2 滑石製模造品	
図版 III 1 B区全景（東より）			
2 平安時代の住居址全景（北より）			

I 三ツ寺 I 遺跡の概要

三ツ寺 I 遺跡は群馬郡群馬町大字三ツ寺字藤塚道上、通称「島畑」に所在する。高崎市街より北へ 5 km、上野国分寺より西へ 4 km で、県道前橋安中線と建設中の上越新幹線が交差する地点に位置し、現状は宅地と桑畑である。

本遺跡は榛名山東南裾部の末端部に近く、東南流する井野川と支流の猿府川とにはさまれた、南北に細長い井出の台地の東縁部に立地し、標高は 123 m である。遺跡地は周辺に広がる水田より約 1.5 m 高く、方形の台地状をなしている（図版 I-1）。

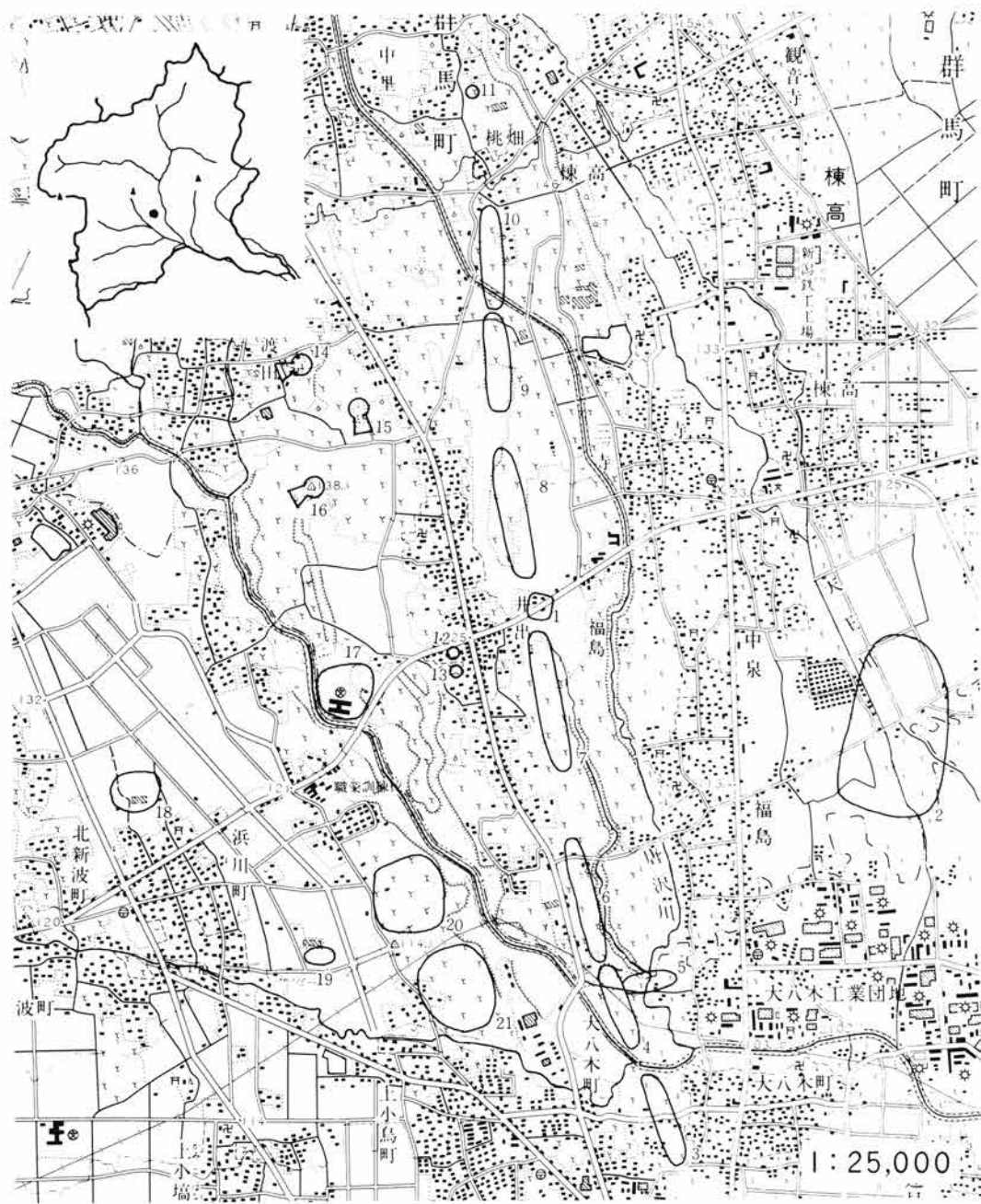
本遺跡周辺の遺跡の傾向としては、縄文時代においては小規模な遺跡が点在する程度であるが、弥生時代後期になるとやや規模の大きい集落が確認されるようになる。古墳時代初頭の遺跡は近辺ではほとんど確認されていないが、後期になると大規模な集落が爆発的に出現し、保渡田には舟形石棺を有する、愛宕塚・八幡塚・薬師塚の 3 基の特異な前方後円墳が構築される。奈良時代においては集落規模がやや縮小するが、平安時代になると再び拡大する。また、井出の台地南端では推定「東山道」が確認され、井野川の南の大八木町融通寺では推定「八木院」も確認されている。また、井野川両岸では古墳時代から奈良・平安時代にかけての水田址も数ヶ所確認されており、集落址と生産の場の有機的な関連が把握できる地域でもある（第 1 図）。

本遺跡は昭和 56 年 5 月より 9 月にかけて、上越新幹線建設の事前調査として、遺跡の北西部分の調査を行ない、特異性を持つ各種の遺構を確認し、遺跡の重要性から、工事計画を大幅に変更して保存処置を取った。また、昭和 56 年 12 月から 57 年 1 月にかけて、猿府川改修工事の事前調査として、遺跡東辺部の確認調査を行ない、規模の確定に貴重な資料を得た。

三ツ寺 I 遺跡の全体像については推定の域を出るものではないが、既調査の結果から幾つかの特性が認められる。

三ツ寺 I 遺跡の全体規模は、一辺が約 86 m の方形の区画の居住区があり、周囲には幅約 40 m、深さ約 3 m の濠をめぐらしている。方形区画は全面が濠の排土により、厚さ約 80 cm の盛土がなされ、四周は河原石により高さ約 2.7 m の石垣が構築されている。また、西辺には 2 基の方台形をした張出部がある。本遺跡の構築にあたっては、大規模な造営工事が行なわれたものと考えられ、濠は貯水・防衛機能を有していたものと推定される。遺跡内部は、柱列と溝によって整然と区画され、大規模な掘立や竪穴住居址が配されている。内部構造には宮殿的な様相を示す面がある。また、祭祀的様相の強い石敷遺構もある。出土遺物には、祭祀用具が目立ち、他に、一般生活用具、生産用具、搬入の古い須恵器、動・植物遺体等がある。

本遺跡の時期は遺構の重複関係、出土遺物、火山灰等から、鬼高 I 期の範囲で押さえられるものであり、同時期で北西 1 km にある、保渡田の 3 基の前方後円墳と強い関連があるものと推定される。



- | | | | | | | | | |
|---|-----------|----|---------|----|----------|-------|--------|-------|
| 1 | 三ッ寺Ⅰ遺跡 | 7 | 村東遺跡 | 7 | 13 | 御庫山古墳 | 19 | 寺ノ内遺跡 |
| 2 | 菅谷古墳群 | 8 | 三ッ寺Ⅱ遺跡 | 14 | 保渡田薬師塚古墳 | 20 | 御布呂遺跡 | |
| 3 | 融通寺遺跡 | 9 | 三ッ寺Ⅲ遺跡 | 15 | 保渡田八幡塚古墳 | 21 | 芦田貝戸遺跡 | |
| 4 | 態野堂遺跡 | 10 | 保渡田遺跡 | 16 | 保渡田愛宕塚古墳 | | | |
| 5 | 態野堂A・雨壺遺跡 | 11 | 中里天神塚古墳 | 17 | 同道遺跡 | | | |
| 6 | 東下井出遺跡 | 12 | 賢海坊古墳 | 18 | 矢島館跡 | | | |

第1図 周辺の遺跡

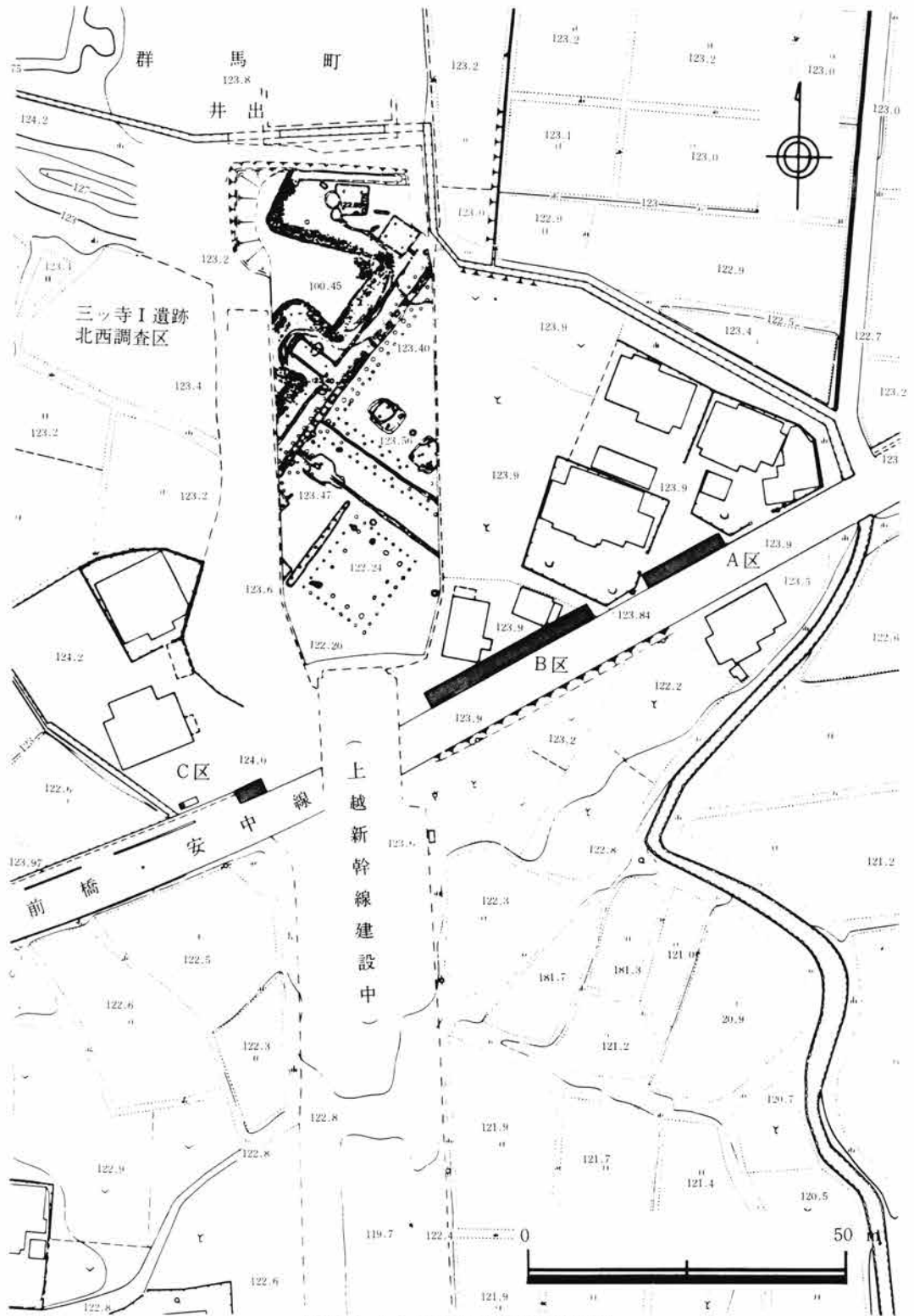
II 調査にいたる経過と調査経過

三ツ寺 I 遺跡は上越新幹線建設用地の事前調査により、その重要性は周知のものとなった。本事業は県道前橋安中線の北側に取り付く歩道建設工事で、昭和56年12月7日に、県土木部（道路維持課）と県教育委員会（文化財保護課）とで事前協議が行なわれ、更に前二者と当事業団とで協議を行なった。その結果を踏まえ、昭和56年12月21日付で県土木部より県教育委員会へ調査の依頼があり、県教育委員会の調整を経て、当事業団で発掘調査を実施することとなった。本工事業計画の実施にあたっては盛土面の保存に留意することで、昭和57年1月18日、県土木部と当事業団との間に委託契約が締結され、その骨子は以下のとおりである。

- 1 調査名称
公共道路（一般県道前橋安中線）交通安全対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 2 調査地点
群馬郡群馬町大字三ツ寺地内 幅2m・距離77m・面積154㎡
- 3 履行期間 昭和57年1月19日～昭和57年3月25日
- 4 事業主体
県土木部（道路維持課）
- 5 調査主体
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 担当者
調査研究員 下 城 正
嘱託員 新 井 順 二

発掘調査に先立ち、調査地点の確認・協議を昭和57年1月14日に行ない、同年1月19日より調査を開始した。調査は県道を片側規制する中でA区より始め、表土掘削は重機を利用し効率化を図った。発掘作業は地元、井出・保渡田・三ツ寺地区の方々の協力を得て進められ、B区においては3軒の住居址を確認し、C区では調査区の深さが4m近くとなり、細心の注意を払って調査を行なった。今回の調査は小範囲であり、検出した遺構が少なく、1月25日をもって各区を埋め戻して調査を終了した。

なお、本調査区での測量基準点は、上越新幹線建設用地の調査区のグリッド基準点（上越新幹線大宮起点83km200）から起用した。



第2図 三ッ寺I遺跡調査区全体図

III 各調査区の状況

調査区域は三ツ寺I遺跡を北東から南西へ斜めに横切る状態で、範囲も狭く、宅地と上越新幹線建設用地とによって3ヶ所に分割されている。3ヶ所の調査区は東より、A・B・Cと称し、調査を実施した（第2図、図版I-2）。

A 区（図版II-1・2）

幅2m、距離14mで、東端の調査区である。2軒の宅地の間に位置し、通行の関係から東半と西半の2回にかけて調査を行なった。

表土より-70cmで三ツ寺I遺跡の盛土が確認された。本調査地区の中央部は盛土がスリ鉢状に緩やかに50cmほど落ち込んでおり、底部上面にはFAの2次堆積層が認められた。また、東端に寄った部分は北東方向へ、調査区を斜めに横切る様に20cmの段差があり、平行に2本の柱穴がある。

出土遺物としては、鬼高期の土師器の小片が少量出土し、石田川期のS字口辺片が1片出土している。

B 区（図版III-1）

幅2m、距離28mの範囲で、宅地から上越新幹線建設用地までの、中央の調査区である。

表土より-50cmで盛土が確認された。本調査区では東端寄りの部分で、平安時代の住居址3軒が重複して確認された。また、三ツ寺I遺跡に関連すると思われる柱穴4本と、上越新幹線用地の調査で確認された、内部を区画する溝が平安時代の住居址に切られた状態で確認された。他に、B軽石を含み、小礫の詰まった柱穴が3本西寄りの部分で確認された。

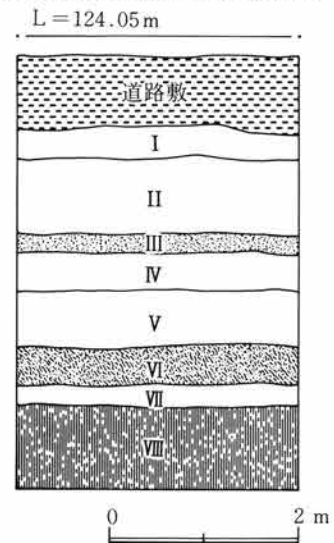
出土遺物としては、調査区東端の盛土上面より、滑石製の子持勾玉（第4図、図版V-2）の断片と思われる小片が出土した。

C 区（第3図、図版IV-2）

幅2m、距離3mの小範囲で、上越新幹線用地の西に接した調査区である。

本調査区は三ツ寺I遺跡の南辺の濠にあたったものと思われ、調査区の深さは、現地表面より-3.70mとなった。

本調査区の土層堆積は、上越新幹線用地で確認された西辺の濠の覆土と同様の堆積状態が認められた。



第3図 C区、濠土層図

堆積状態は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 表土 (30cm) 浅間Aを含む暗褐色土。上部に道路敷の盛土が80cmある。
- 第Ⅱ層 茶褐色土 (80cm) 浅間Bを含み、鉄分の沈澱が認められる。
- 第Ⅲ層 浅間B層 (20cm) 上半に淡桃色の灰層がある。風成の一次堆積層。
- 第Ⅳ層 黒褐色土 (40cm) 粘性強く、小礫を含み、鉄分が沈澱している。
- 第Ⅴ層 灰黒色土 (60cm) 第Ⅳ層より粘性強く、粒子が密である。第Ⅳ層と第Ⅴ層の間には部分的に、薄い砂層が入り込んでいる。
- 第Ⅳ層 F A 層 (40cm) 水成の一次堆積層で、青白色を呈している。
- 第Ⅶ層 黒色土 (20cm) 粒子が密で、ヘドロ状をなしている。
- 第Ⅷ層 灰白色シルト層 濠の底面の基盤層で、粒子細かく、非常に固く締まっている。
- 本土層中からは遺物は出土せず、西辺の濠で検出された植物遺体等も確認されなかった。

Ⅵ 平安時代の住居址と遺物

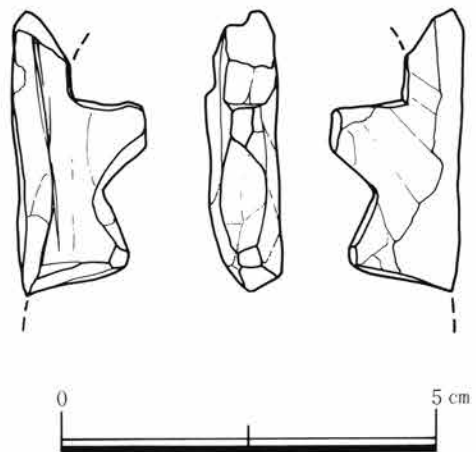
住居址 (第5図、図版Ⅲ-2・Ⅳ-1) 3軒の住居址が階段状に同一方向 (N-8°-W) で重複している。3軒とも住居址の北半のプランが確認されただけで、カマド等は確認されなかった。なお、住居址番号は同一遺跡ということで、上越新幹線用地 (三ツ寺Ⅰ遺跡北西調査区) で検出された住居址からの引き続きの番号とした。

8-a住居址は北辺で3.35mの規模で、ほぼ直に確認面より50cm掘り込まれている。床面は平坦で、やや固く締まっており、東壁中央寄りの床面直上に小範囲ではあるが、黒色の灰が薄く堆積していた。覆土中には、国分期の遺物よりも鬼高期の遺物が多く流れ込んでいた。

8-b住居址は北辺で5.18mを計り、やや規模が大きい。確認面より40cmほぼ直に掘り込まれ、床面はあまり固く締まっていない。出土遺物は、国分期のものが少量出土した。本住居址は、8-a・8-c住居址によって切られている。

8-c住居址は、ほぼ直に確認面より20cm掘り込まれている。床面はあまり固く締まっていない。出土遺物は国分期の須恵器の甕片や碗等が少量出土した。本住居址と8-b住居址は三ツ寺Ⅰ遺跡の内部を区画し、覆土がF Aの二次堆積層で埋まっている1号溝を切っている。

また、8-a・8-c住居址は鬼高期の柱穴2本を切っている。



第4図 滑石製模造品

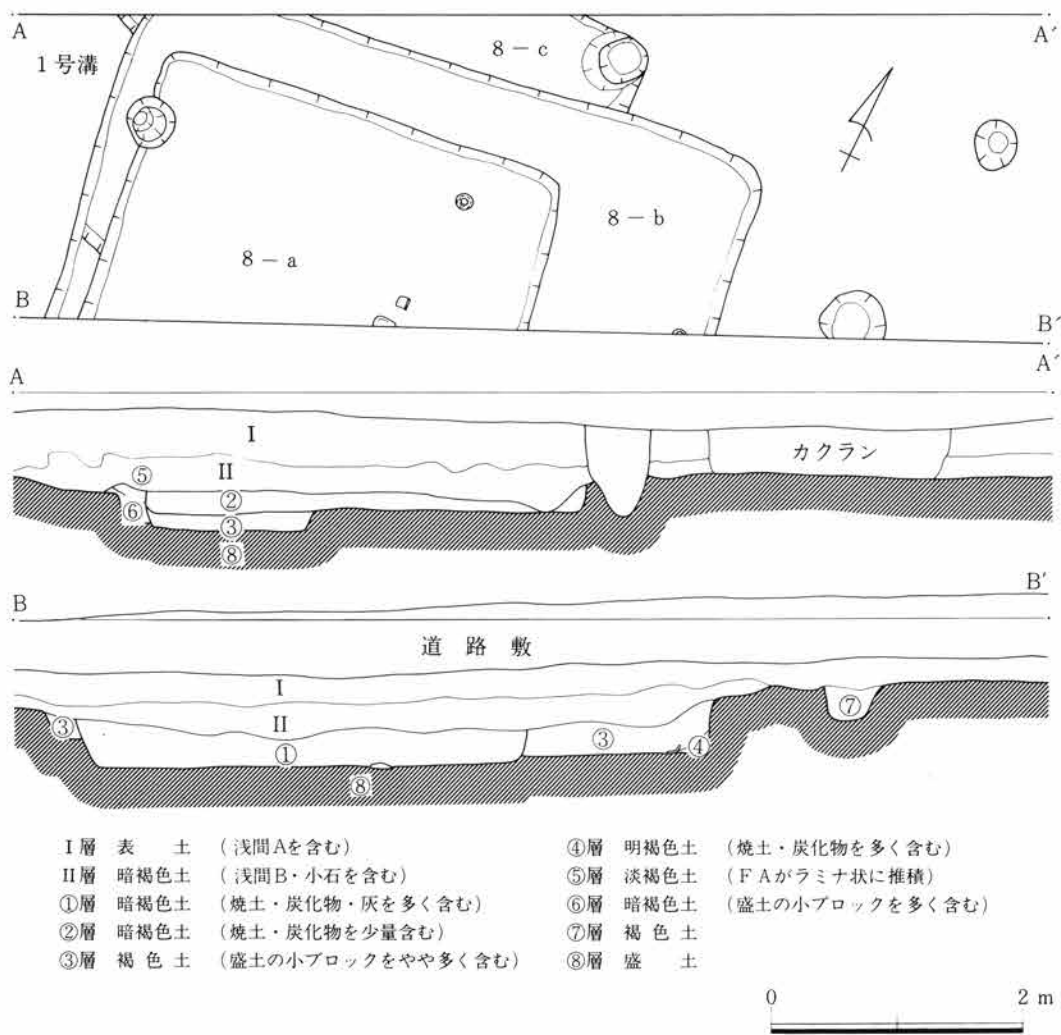
住居址の出土遺物（第6図、図版V-1）

1 土師器 杯〔器高3.4cm、底径8.5cm、口径11.8cm〕

底部は平底を呈し、器高は浅く、体部はやや直線的に開口し、口辺部はやや外反する。底部は一方方向からのケズリが認められ、体部下半には指による押さえの痕があり、口辺部から内面全面にはナデによる調整が行なわれている。胎土はやや砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。また、器面の内外面にはタール状の付着物がある。

2 須恵器 碗〔器高3.3cm、底径6.8cm、口径13.1cm〕

底部は右方向の回転糸切りで、やや底径が大きい。体部はやや内彎ぎみに直線的に開口し、口辺部はやや外反する。器面にはロクロ痕が明瞭に認められる。胎土は緻密で黒色の鉱物の混入が認められる。色調はやや明るい灰色を呈し、焼成は良く焼き締まっている。本個体は秋間産の須恵器と思われる。



第5図 平安時代住居址実測図

3・4 須恵器 碗
 [3 器高3.1cm、底径5.7cm、口径13cm 4 器高3.2cm、底径6.1cm、口径12.8cm]

底部は右方向の回転糸切りで、底径はやや小さい。体部はややふくらみをもって開口し、口辺部はやや外反する。器面内外面にはロクロ痕が認められる。胎土には砂粒を含み、4には黒色の鉱物が認められる。色調はや

や暗い灰色を呈し、焼成はやや焼き締められている。

5 須恵質の高台碗〔器高5.2cm、底径9.9cm、口径16cm〕

やや大きい器径である。底部は右方向の回転糸切りで、やや外反する高台が付く。体部はややふくらみをもって開口し、口辺部はやや外反する。器面にはロクロ痕が明瞭に認められる。胎土には小石を含み、あまり良くない。色調はやや褐色を帯びた灰色を呈し、焼成はあまり良くなく、焼き締められていない。

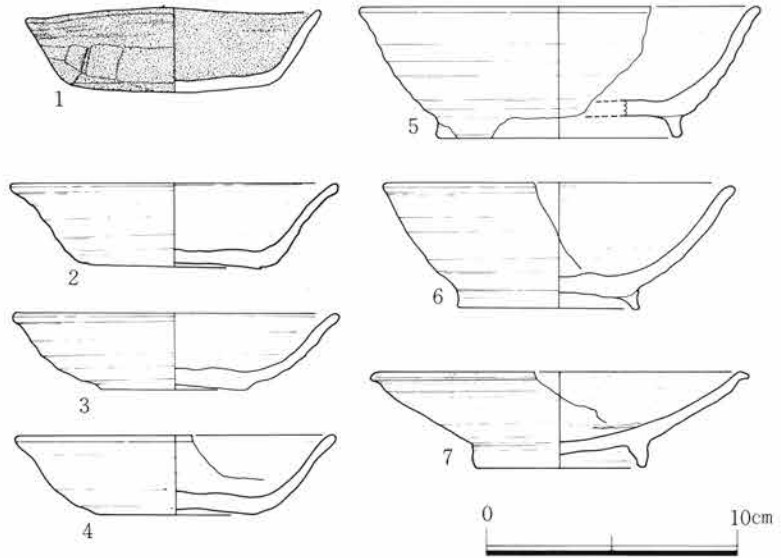
6 須恵質の高台碗〔器高5cm、底径7.3cm、口径14.1cm〕

底部は右方向の回転糸切りで、やや外反する高台が付く。体部はややふくらみをもって開口し、口辺部はやや外反する。器面にはロクロ痕が認められる。胎土には多量の小石・砂粒を含む。色調はやや暗い灰色を呈し、焼成はあまり良くなく、焼き締められていない。

7 灰釉 皿〔器高3.8cm、底径6.8cm、口径15.1cm〕

底部にはへらによる調整が認められ、やや太い高台が直線的に付けられている。体部は緩やかに開口し、上半でややふくらみをもち、口辺部は横方向に外反する。付け懸けによる布釉で器内に重ね焼き痕が認められる。東濃糸の胎土でO-53に平行するものと思われる。

以上が3軒の住居址から出土した、完形および大片の遺物であるが、2が8-b住居址、1・3・4が8-a住居址、5・6・7が8-c住居址からの出土である。



第6図 平安時代住居址の出土遺物

V ま と め

本調査は小範囲ではあるが、三ツ寺 I 遺跡の全体像を把握する上で、重要な資料が摘出され、意義の多い調査となった。また、平安時代の住居址より出土した埴等は良好な編年観を提示するものであり、以下、今回の調査の結果をまとめる。

① 三ツ寺 I 遺跡の大きな特徴である、濠の排土による盛土が A・B 両区でも確認され、約 86 m 四方の方形区画の全面に施されている可能性が大となった。

② A 区でのスリ鉢状の落ち込みの性格は不明であるが、上越新幹線用地の調査区で確認された、住居址・溝・掘立の各遺構の覆土にある FA の二次堆積層が、本遺構でも確認されている。三ツ寺 I 遺跡の存続期間には FA が当時の地表面に堆積していたものと思われる。

③ 三ツ寺 I 遺跡を南北に二分する 1 号溝の延長が平安時代の住居址によって切られているのが確認されたが、本溝は遺跡の中央部までは確実に延びることが判明した。

④ 三ツ寺 I 遺跡と同時期の柱穴が A・B 両区で確認されたが、遺跡内部にはさらに何らかの建造物があると思われる。

⑤ C 区は南辺の濠の一部にあたったものと考えられ、方形区画の南限を知る貴重な手掛かりとなった。

⑥ 平安時代の住居址は、既調査の結果等からあまり大規模な集落の可能性は少ないが、三ツ寺 I 遺跡周辺に広がっている、浅間 B 下の水田址と強い関連性があるものと思われる。

⑦ 平安時代住居址からの出土遺物は、2 が 9 世紀前半、1・3・4 が 9 世紀中葉、5・6・7 が 10 世紀前半に比定されるものと考えられ、3 軒の住居址は重複関係と出土遺物から、8—b 住→8—a 住→8—c 住の順と考えられる。

なお、三ツ寺 I 遺跡は上越新幹線の側道調査が 57 年度に予定されており、遺跡の南・北の範囲が把握されるものと思われる。また、本遺跡の周辺の調査も今後予定されており、遺跡の内部構造・全体規模・性格等の解明が行なえるものと考えられる。

図版 I



1 三ッ寺 I 遺跡より愛宕塚古墳を望む



2 調査区近景（南西より）

図版II



1 A区(南西より)



2 A区南半の状況(西より)

図版Ⅳ



1 平安時代住居址遺物出土状態（北西より）

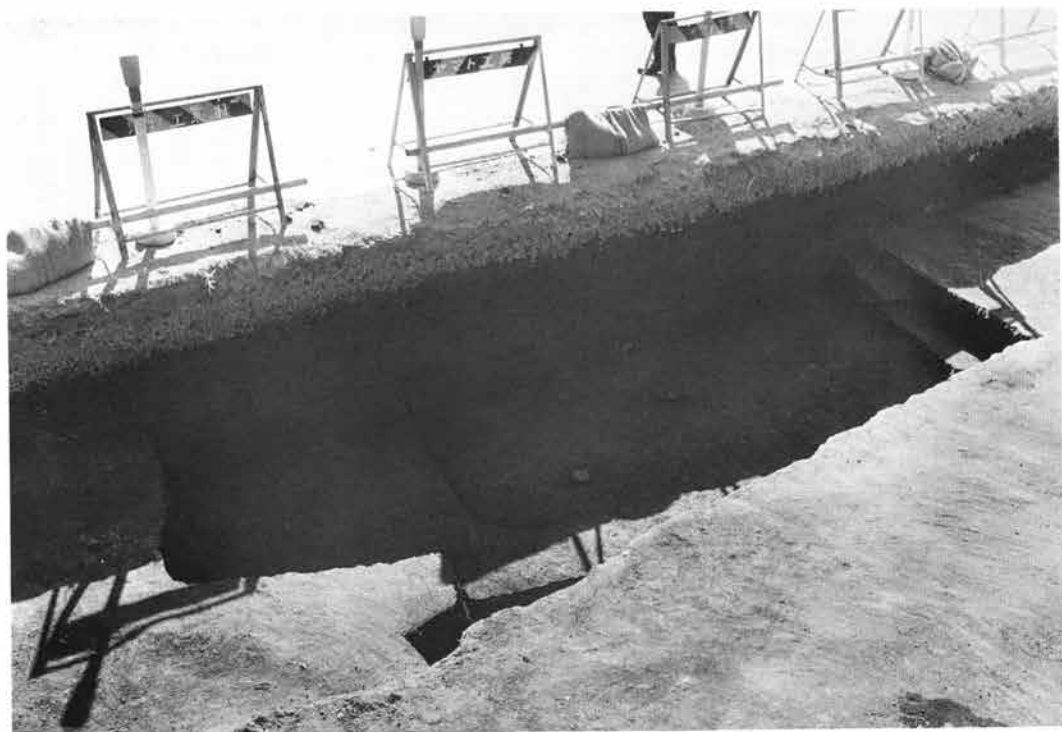


2 C区北壁断面（壕の覆土、南より）

図版III

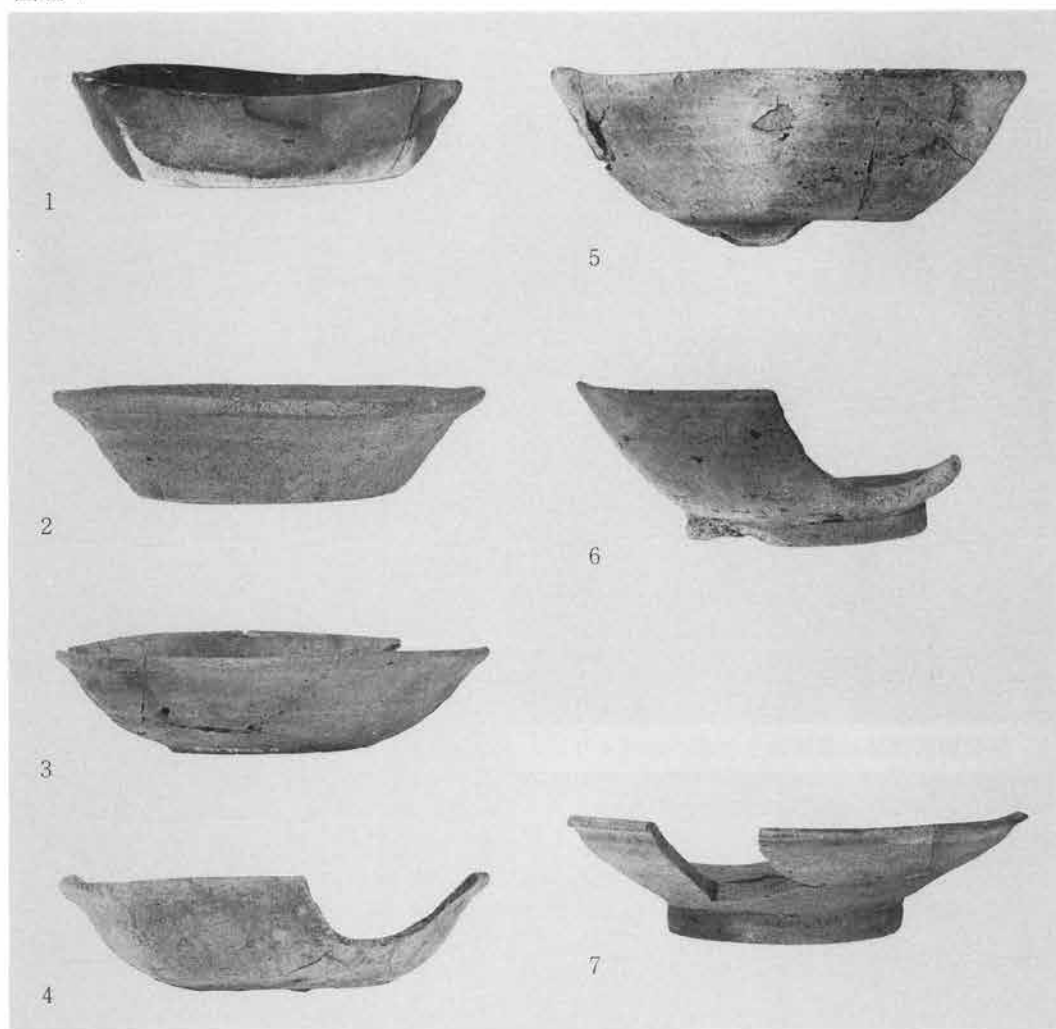


1 B区全景（東より）

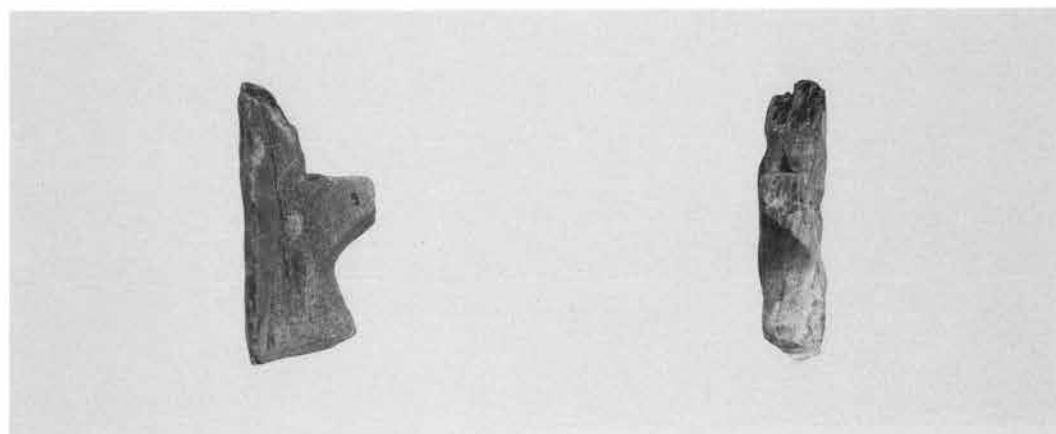


2 平安時代の住居址全景（北より）

図版V



1 平安時代住居址の出土遺物



2 滑石製模造品

昭和56年3月20日 印刷
昭和56年3月25日 発行

公共道路（一般県道前橋安中線）交通安全対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

三ッ寺 I 遺跡

発行 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
印刷 朝日印刷工業株式会社